文語の苑

メールマガジン第三十七　号（平成二十六年七月）

からす

我が家より駅へ至る途中に長き桜並木の道あり。春は萬朶の花心を躍らしめ、夏は緑の木陰涼風を誘ひ、秋は紅葉碧空に映え、冬は枯枝の彼方に遥かなる街並みを望む。我が愛する散歩道なり。過日烏の番道沿ひの柵の上に止まりたるが、余の近づくやふはりと桜の大枝に飛び移る。余かあと声を掛くればかあと応ふ。余杖を引きて歩むほどに、烏も柵を飛び移りて余に従ふ。余と烏啼き交はしつつ行くこと数丁、通りすがりの老婦人、話にかかる事ありと聞きしにそは真なりと驚く。

翌日ポタラカレッジの帰りに喫茶店に寄り、サンドウィッチを取り昼食を認む。残したる耳を紙に包みて、教材等を入れたる紙袋に仕舞ふ。駅より桜並木に差し掛かるや果たして烏の番余を待ち受けたり。挨拶を交はしたる後サンドウィッチのパン屑を道に撒けば彼等そを啄ばむに忙しく、余を追ふことはせず。

その後行き違ひて会ふことなけれど心中密かに再会を期す。フランチェスコ、公冶長の域には及ばずともせめて烏語の数語なりとも学ぶことを得ば之望外の喜びと言ふべし。

愛甲次郎

文語の苑

メールマガジン第三十七号

小倉百人一首　三條天皇

心にもあらでうき世にながらへば　戀しかるべき夜半の月かな

藤原道長の藤原氏全盛時代に在位された三條天皇（九七六－一〇一七）の、お嘆きの歌です。心で望んではゐ（い）ないのに、この憂ひ（い）多き世に更に長く生きたとしたら、今夜、まだ見える眼で眺めた夜半の月を戀しく思ふ（う）だら（ろ）う。天皇は、切々と、か（こ）うお歌ひ（い）になります。天皇は眼疾をお患ひ（い）になり、政治の實權を握る藤原道長は、僭越にも、自ら天皇に御退位を慫慂致します。その上天皇は、御息女の内親王の一人が、齋院として伊勢神宮にお仕へ（え）になった後、京に歸って來られたところへ、叔父の道長に追落された藤原伊周の子の道雅が、通って來てゐ（い）るとの噂を耳にされ、お怒りの餘り、二人の仲をお裂きになりました。この時道雅が、密かに、前の齋院の御所の高欄に結付けた歌が、百人一首に採られた「今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな」です。この内親王は、未だ十七才の姫君でしたが、醜聞のため世をはかなんで落飾され、間もなく亡くなられます。内裏の、二度の失火の御不幸もありました。そんな御心勞が重なって、三條天皇の世を厭ふ（う）御氣持は強まったことでせ（しょ）う。

三條天皇は、父君が四代前の冷泉天皇、母君は藤原道長の姉の超子で、超子の同母の姉妹の詮子が、先帝一條天皇の母后ですから、一條、三條の兩帝は共に道長の甥で、從兄弟同士に當られます。一條天皇崩御により即位されたのは、既に御歳三十六の御高齢でした。一條天皇御在位の折は、道長が甥の伊周と、藤原氏の氏長者をめぐって争って居りましたから、道長に、天皇へのご遠慮がありました。が、三條天皇の御代になると、道長は關白にさへ（え）ならず、專横を極めます。天皇を蔑ろにし、御譲位を迫る僭越は、曾て強引に一條天皇中宮に入内させた娘の彰子の皇子の親王を、帝位に就けるためです。その一方で道長は、天皇の御立后を妨害し、自分の娘妍子を内裏に入れて中宮にしますが、生れた子が内親王と知ると、あらは（わ）に不満を表します。三條天皇は道長の無禮をお怒りになり、有職故實に詳しい右大臣の、藤原實資に慨嘆なさいますが、どうにもなるものではありません。この歌をお詠みになった直ぐ後、皇后腹の親王の立太子を條件とされて、道長の外孫の後一條天皇に、御譲位になりました。但し三條天皇御自身が翌年に崩御され、後ろ盾を失は（わ）れた皇太子の御即位は叶ひませんでした。

三條天皇の御一生は、この歌から窺は（わ）れるや（よ）うな、悲運の御一生でした。ただ人の世は皮肉なものです。藤原氏、即ち道長の外孫の天皇は、後一條天皇から數へ（え）て三代だけでした。三條天皇の後、四代目の天皇には、三條天皇と道長の娘妍子中宮の間にお生れになった禎子内親王のお子、つまり三條天皇の外孫の親王が即位されます。英明を以て聞えた後三條天皇です。後三條天皇は、母方の御祖父の三條天皇を尊敬せられ、政治の實權を藤原氏から取戻されて、種々の政治改革を斷行なさいました。後三條天皇の後、皇統は白河院、堀河天皇、鳥羽院へと續き、藤原氏の全盛時代は終り、時代は、天皇位から退隱された後の、院による政治、即ち院政へと移って行きます。

三條天皇のこの御歌の中の月は、天皇の悲運の御生涯と共に、藤原氏の榮華の時代から院政へと移って行く歴史の推移を、映したに違ひ（い）ありません。

加藤淳平

文語の苑

メールマガジン第三十七号

風吹く時ぞみだれざりける　愛國百人一首を讀む（三十二）

一方にきそろひて花すゝき風吹く時ぞみだれざりける　香川景樹

すゝきが穗を揃へて一方向に靡いてゐるよ、すゝきは風が吹くと一穗も亂れないのだなあ

薄は秋の七草、萩、尾花、葛、女郎花、藤袴の中では尾花のことです。秋に穗の出てゐるさまを「花すゝき」といひます。この花すゝきが吹く風の方向に一齊に靡くさまは或いは時流に無批判に流される風潮とも見られませうが、詠者の香川景樹は、無風状態には思ひ思ひの方向に向いてゐた花すゝきが一度風が吹くや忽ち方向が揃ふことに、平時には世論が二分にも三分にも紛糾しても、一度非常時となれば國論統一して事に當る我が國民性を見てゐるといふ川田順の見解もあります。外國船の出現が増え、攘夷か開國か議論漸く沸騰し始める時代を生きた景樹は明治維新による國論統一を見通してゐたかのやうに思はれます。

しかし景樹は一方で、當時漸く有力となりつゝあつた賀茂眞淵の主導する和歌に於ける萬葉集尊重の流れに敢然と戰ひを挑み、古今和歌集を理想とする歌風を主張して、「桂園派」の運動を展開します。私家集「くゑい桂ゑん園いつし一枝」はその成果であり、今日でも清新高雅な秀歌が多いと高く評價されてゐて、掲出の歌もこれに載つてゐます。

このやうな事情を踏へてこの歌を讀み返してみますと、下の句の「風吹く時ぞみだれざりける」と係結で強調してゐるのは、花すゝきが風に亂れることが無いやうに、我々も議論を鬪はすにしても、學問に裏附されたもので公正に行ひ、一朝有事の際には、直ちに一致點を見出せるやうに日ごろから心しておかねばならないといふことです。かうした堅い信念があつたからこそ一萬人を越える弟子たちが景樹に心服したのだと思はれます。

ところで上述の萬葉集と古今集との爭ひに就て現代の私達は正岡子規を無視する譯には參りません。有名な「つらゆき貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集にこれあり有之候。」で始まる「再び歌よみに與ふる書」で子規は香川景樹は古今貫之崇拜にて見識の低きことは今更申すまでもこれなく無之候。俗な歌の多き事も無論に候。しかし景樹には善き歌も有之候。自己が崇拜する貫之よりも善き歌多く候。それは景樹が貫之よりえらかつたのかどうかは分らぬ。ただ景樹時代には貫之時代よりも進歩してゐる點があるといふ事は相違なければ、從つて景樹に貫之よりも善き歌が出來るといふも自然の事と存候。（中略）景樹を學ぶなら善き處を學ばねば甚しき邪路に陷り、今の景樹派などと申すは景樹の俗な處を學びて景樹よりも下手につらね申候。

と古今集と貫之を批判しながらも、景樹を公正に評價してをります。

市川　浩

文語の苑

メールマガジン第三十七号

文語唱歌「われは海の子」

尋常小學讀本

事音楽にては、歌の節をかりて歌詞を代ふる「替へ歌」なるもの當り前のごとくに行なはれきたれり。されど民間なれば兎も角、日本にては文部省まで歌詞を變更する事を恥とも思はぬは如何。「春の小川はさらさら流る」は、明治以來文部省唱歌として教科書に載せられつづけたれど、昭和十七年には、文語體なるが望ましからずてふ口實にて、「春の小川はさらさら行くよ」と改訂せられたり。戰後、國語をいぢりて國語の體系を醜惡なるものに替へて恬として羞ぢぬ態度に通づるところあらむや。

この歌、秀抜にしてよく日本人の心に訴ふるところあるにより、戰後も音樂教科書に採用せんとせし時、今度は「軍艦」なる歌詞のあることより、日本海軍に懼れを感じをりしＧＨＱ、七番の歌詞を切るべしと命じたると云ふ。文部省その意向を體し、歌詞は3番までに留めたり。されど他の章句は變ふることなければ、この歌、文語のままに殘りたり。不幸中の幸ひなりと言ふべきか。

一　我は海の子白浪のさわぐいそべの松原に、
煙たなびくとまやこそ　我がなつかしき住家なれ。

＊とまや・苫屋＝茅や菅などを編んで作つた粗末な家や舟

二　生れてしほに浴して　浪を子守の歌と聞き、
千里寄せくる海の氣を　吸ひてわらべとなりにけり。

三　高く鼻つくいその香に　不斷の花のかをりあり、
なぎさの松に吹く風を　いみじき樂と我は聞く。

＊不斷の花のかをり＝「普段」と勘違ひして唱ふ人多し。これは「不斷草」のこと。又「かをり（薫、香）」を「かほり」と雅語めかす人あるも、正しくは「かをり」

＊いみじき＝普通でない、たいへん優れてゐる。

四　丈餘のろかい操りて行手定めぬ浪まくら、
百尋千尋海の底　遊びなれたる庭廣し。

＊丈餘のろかい＝丈は長さの單位で十尺（約三メートル）餘り。「ろかい」は和船を漕ぐときに使ふ「櫓」と「櫂」のこと。

＊百尋千尋＝「尋」は長さの單位、六尺、約一・八メートル、ここでは「たいへん深い」の意。

五　幾年こゝにきたへたる　鉄より堅きかひなあり、
吹く鹽風に黒みたる　はだは赤銅さながらに。

＊かひな＝二の腕のこと。

＊赤銅・＝銅合金、佛像や工藝に用ゐられる。赤銅色に似た黒く焼けた肌。

六　浪にただよふ氷山も來らば來れ恐れんや、
海まき上ぐるたつまきも　起らば起れ驚かじ。

＊來らば來れ、起らば起れ＝來るなら來い、起るなら起れ

七　いで大船を乘出して　我は拾はん海の富、
いで軍艦に乘組みて　我は護らん海の國。

＊いで＝「さあ」、人を誘つたり、自分で行動を起さうと決斷した時の語。

谷田貝常夫

文語の苑

メールマガジン第三十七号

江戸時代の外国語会話熱

現在、英語教育は受験英語に傾きすぎて、「日本人は英語は読み書きはできるが話したり聞いたりすることができないから、もっと会話中心の英語教育に切り替えるべきだ」という意見があります。考えればおかしなことです。だって、日本人は「英語の読み書き」なんて、誰もできないのですから。最近は寧ろ、ボーイハント、ガールハントのための会話英語ばかり先走っていますので、私はもっと文法を教えて欲しいと思っています。

江戸時代の初めにも、会話教育優先論がありました。

英語ではなく、中国語です。

日本人は昔から漢文をやっていましたから、古典中国語の読み書きはできるのですが、会話が駄目でした。

「中国語は会話もできなくてはいけない」という主張が江戸時代の初めに起こったのです。そして、中国語会話が流行しました。そして、中国語会話のことを《唐音》と言ったのです。

「行」を「あん」と読むような特殊な音読みを《唐音》と言うことがありますが、あれは、当時の人たちにとっては「現代中国語」だったのです。ですから、中国語会話のことを《唐音》と呼んだのも、結局は同じことだと言えるでしょう。会話といえば、古典ではなく、現代中国語のことになるのですから。

なんと、第五代将軍徳川綱吉は、かなりのレベルで、中国語会話ができたということです。

細川ガラシャ夫人は、かなりのレベルで、ラテン語とポルトガル語ができたということですが。

一方、読み書きができれば、会話なんかできなくていいんだと頑張る人もいました。

徳川家宣と家継に仕えた新井白石は、当代随一の漢文の名手で、日本を訪れた朝鮮通信使を驚愕させたという記録が残っています。

ところが、白石は、中国語会話《唐音》にはまったく興味を示しませんでした。素晴らしい根性です。

もっとも、才能がなかったわけではないようです。

家宣の時代にイタリア人宣教師のヨハン・シドッチが潜入してきて、捕まりました。

このシドッチを、幕府は小石川の切支丹屋敷（山屋敷）に収容しました。

白石はここを訪問して、シドッチを訊問しました。

シドッチも白石も、非常に優れた人でした。

白石はシドッチからイタリア語とラテン語を学び、通訳なしで会話ができるようになったということです。

シドッチの末路は悲劇に終わるのですが、それについてはいずれまた。

高田　友

文語の苑

メールマガジン第三十七号

「明治百家文選」を読む

水道橋界隈の古書肆「日本書房」にて、「明治百家文選」（隆文館刊、明治四十年再版）を五百円にて購ふ。該書の古書相場は六千円程度なれば掘り出し物といふべし。

編者は文學士の久保天隨氏なり。天隨、明治八年の生れにて、東京帝國大学漢文科を卒業後、多くの漢文関係の著作あり、後に台北帝大教授も務む。昭和九年歿。

本書刊行の趣旨は、序にある如し。輒ち曰く、「文を學ぶ、必ず先づ標的を定めざるべからず。その法たるや、人名あるものゝ中、わが性の最も近きを撰び、その得意の作数篇を取り、文法の在るところに就いて縷陳して分析し、しかる後、心を潜めて誦読し、久うして已まざれば、文氣自然に我が胸臆の間に浸潤」せむ、と。

本書の構成、「現代名家の文百篇」、著者苗字のいろは順に並ぶ。目次を眺むれば、鏡花、蘇峰、蘆花、紅葉、樗牛、逍遙、獨歩、子規、藤村、一葉、鴎外等を含み、壮観といふほか無し。

冒頭の文は井上巽軒（哲次郎）の「色彩に附随する観念」なり。曰く、「色彩の性質、関係、結果等を研究することは、画工の怠るべからざる所なるが如し、然るに世の画工は此の如き研究をなさずして、唯々経験により て色彩を施すに過ぎず」と。その後に、赤色は快活なる旨趣を有し黒色は陰鬱なる旨趣を有す等の議論の展開之有り。

第二の文は、池辺鉄崑崙の「奈破崙帝の臨終」なり。「五月三日、精神不覚となる。きれぎれなる言語の中に、吾が児・・・軍隊・・・デゼックス・・・」とあり、続けて五月五日午後五時四十五分に帝の崩じたる様を描く。以下、小生にとり印象に残りたるは、三宅雪嶺の「不生長の英雄」てふ文なり。歳四十にして台湾にて空しく台南の煙と為りたる兄の追悼文なり。曰く、「少時漢学を修め、十三歳蘭学に入り、佛學に転じ、翌年英学に転じて、十七歳東京に出て、二十四歳東京大学法学部を卒業せしが、斯く修業するの際、幾分か諸芸に通達せり、未だ郷関を出でざりし時、詩歌撃剣一通り修め、大学を出づる頃は、點茶挿花の法を解し、且つ吹笛に巧みなり、能く泳ぎ、能く相撲し、能く銃猟し、而して又好で書を読み、ホーメルの詩の如き、ポープ、ブライアントの譯を比較して精　読せし等、洵に誂ひ向のレファインド、ゼントルメンたりしなり。」とし、「嗚呼悲しい哉、於戯（ああ）わが亡兄を悲むは、又世の成長せざる豪傑を悲むものぞかし。」と締め括る。雪嶺身内の追悼文は珍し。

雪嶺の妻、三宅花圃の文も選ばれたり。標題は「女の娯楽」。和歌、裁縫、刺繍、絵画、読書、手習、音楽はいづれも皆室内の遊びを旨とすれば、「心の晴れけむ筋無きぞ口惜しき」と述べ、婦人の数少なき戸外の遊びとして写真の術を推奨す。「家の人々うちつれて近郊の散歩にも、まづこれに夫子の姿うつし入れては、日記にそなへてのちの思ひ出にも為しつべく、盛暑の候、一家挙りて、山水の邊り、轉地保養のほどは、朝夕の富獄を手箱の中に納め、漕ぎいづる舟のあとなき大海原も、懐紙の間にさしはさみて、いく久しく折々とり出でむ楽しみは、われ一人にはかぎらざるものならむかし」とあり、花圃の文体、さすがに美し。

内村鑑三の文は「愛國的妄想」なり。曰く、「日本教と称して異常の倫理學的系統は編み出され、万国歴史の攻究は疎んぜられ、紫式部の源氏物語は愛國的讀本として採用せられ、バーク、ゴールドスミスの作は或は博愛主義を教るの故を以て、教科書としては使用を禁ぜらる。科學にワット、ニュートンの跡を逐ふも、倫理に鎌足、正成を仰ぎ、西洋を學ぶに常に實利的観念を以てし、彼の技藝を受けて其精神を却く」と。結論部分には、「余輩は世界の標準に照して日本を攻究するの必要を感ずるものなり」とあり、編者この文を採択するの気持ちを思ひ、明治百家の思想傾向の多岐に亘ることを許容する懐の深さを改めて感ずる次第なり。

「明治百家文選」、紙数の関係に依り紹介し尽くすこと能はず。先人の感性を學ぶ縁ともなる本書は、「文語百撰」と並び座右の書の一となるらむ。

土屋　博

文語の苑

メールマガジン第三十七号

「希望の未来」

一九九五年十二月、朝日新聞社は米国のノーベル受賞者エリー・ウィーゼルの財団と共催にて「希望の未来」と題する国際会議を東京と広島にて開催せり。世界各国より招請せるノーベル賞受賞者たち綺羅星のごとく居並び、希望の未来につきての講演と議論を展開せり。

朝日の先輩より要人の随行通訳者手配依頼せられ、語学堪能なる女性たち三十名を率ゐて会議の裏方に専念す。ロジ全般に亙りては、電通を始め担当者それぞれ振り当てられたれども、講師と連絡を取るは我らなるがゆゑに、総括コーディネータの役割を負はされたり。開会式は東京の国連大学にて行はれ、夜は当時皇太子におはしましける今上陛下を御迎へし、浜離宮朝日ホールにおいてガラ・コンサートも開催せられたり。チェコのハベル大統領専用機にて同行記者団率き連れ羽田空港に着陸す。インドのナラヤナン副大統領(後に大統領就任)も膨大なる人数の一行を伴ひて来日す。

予算の関係ありて、外国要人三人に対し一人のアテンド付くといふ業務にて、総勢百名の来賓移動するたびに肝つぶるる思ひなりき。開会式翌日新幹線にて広島への大移動となれり。宿泊先の帝国ホテルより東京駅まで何台もの大型バスにての移動に、手伝ひするはずの旅行会社の誘導心もとなく、新幹線出発まで「積残し」なきか確認するは正に胃痛を覚ゆる過程なりけり。インド一行は自国の治安悪しき故、荷物を東京より輸送する際、トラックの後部扉を「封印」し、その後を広島までインド警察三名大使館の車に乗車して、追ふといふ事になれり。更には副大統領一行移動するたび、車列は十台と決められたるにも拘わらず、毎回倍に膨らみ、我等警視庁より大目玉くらふ。バトカー先導にて、信号機止めたるを叱責せられたれども如何ともしがたし。何度注意せられるもインド側聞入れず、朝日新聞の担当者閉口してあり。広島の宿泊先はリーガ・ロイヤルなれど、インド一行は広島プリンスなりき。インド側の言ひ分は、チェコに比ぶればインドは大国なれば、ロイヤル・スイートにあらざれば宿泊を肯んぜずとの無理難題。さやうなる部屋はホテルに一つのみ。やむなく広島プリンスを選定す。

会議は広島国際会議場に於て行はれたれど、出入りの際、多くの黒塗りの車と大型バスに加へ、車列組まねばならぬ一圏多数ありて、毎回混乱す。毎晩、宴会終はり一段落思ふも束の間、午前一時より反省会と翌日の打合はせこれありて、部屋に戻るは午前三時、シャワー浴び就寝し、五時には起床。朝食とりながら随行通訳者たちそれぞれの接遇要人の動き及び全体日程などの指示を出だす。三日目、要人いよいよ離日するの日、旅行会社スタッフ疲れはて機能せぬ故、その任は我らに託されき。大阪伊丹空港より出発のベトナムの大臣搭乗予定の航空便遅延したれば、成田より出発予定のベトナム航空便もこれに合はせて遅らするなど、普通にはあり得ざる事起きぬ。米国名門新聞及びインドの最大手新聞社のオーナーたちそれぞれ荷物十五個以上あり、京都の俵家に泊まる予定なれば、荷物を降ろさんがためのみの随行者を要求す。かくのごとき業務は不可能にて、腹立たしきこと限りなきも、その当時宅急便もなかりしかば、ホテル間の便を利用することにて決着せり。かかる無茶苦茶の要求頻繁にあり、ために睡眠時間も毎日二時間程度にて疲労困憊し、同僚も吾も広島より新幹線の中にて熟睡し、終点東京駅に帰着するまで、まったく気を失ひたる状態にてありけり。我ら若く体力あればこを仕おほせたれども、かくも奇怪難儀なる作業の強要は二度と御免蒙ると思ふほどに疲れ果てたり。裏方つとめし我らには「希望の未来」の会議内容など聞く時間も余裕もなく、そもそも希望の未来とは如何なるものなりやと、考へこみつる。

赤谷慶子

文語の苑

メールマガジン第三十七号

初めての發表

田園調布文語教室に加入し凡そ一年を經過せり。毎月短き文語作文を提出、先輩諸氏の添削を請ふ。又、教科書「文語名文百撰」の一節選出し、參加各氏廻り持ちにて解説行ふ。余は文語作文のみにて精一杯なれば、發表の機會あらむとも尚數年先の事なるべしと高を括りつるに、豫期せぬ事に次回發表を勸めらる。固辭するも引受けざるを得ぬ雰圍氣なれば了承す。

課題は吾妻鏡の一節にて、「圖書館にて調ぶれば良し」等と些か安易に考へたり。早速近くの圖書館を訪ねたり。先づ兒童向けに書かれたる讀み易き物無しやと探せど見當らず。館の電腦端末にて檢索するに、吾妻鏡は文學書に有らずして歴史書に分類されたり。余、斯かる初的知識すら有せず。

「全譯吾妻鏡」てふ書籍有り。分類番號二一〇．四なる日本史の書架に行けど見當らず。再度檢索するに、吾妻鏡は「歴史」の棚にあらず「鄉土資料」に有り。吾妻鏡を横濱鄉土資料とするとは洵（まこと）に意外なり。

其「全譯」第一卷の該当部分、文治（ぶんぢ）二年八月十五日を開く。現代語譯見當たらず。「全譯」の書名は虚偽なるか。岩波文庫の譯註附き本も參照すれど、現代語譯無し。此處に至りて漸く氣附く。吾妻鏡の原文は漢文にて其を讀下したが「全譯」なるらんと。斯かる譯のみにては余發表解説すること能はず。些か困惑せり。

苦しき時のインターネット頼みとて電腦にて檢索、忽ち現代語譯有り。先づ見出せる現代語譯にては、西行は頼朝共々寺社を參詣せしやうに書かれたり。疑問なしとせず。再度檢索。次なる現代語譯、「而して」を「そしたら」、「云々」を「…だってさ」等とす。口語に傾き過ぎたり。

横濱市立中央圖書館に吉川弘文館版「現代語譯吾妻鏡」を見出し、漸く安心を得たり。戯れに石ノ森章太郎畫「マンガ日本の歴史」を覗き見るに、第十五卷に頼朝と西行の出會ひの場面有り。其直前の場面は勸進帳なり。歴史上著名なる出會ひなるを知れり。

發表資料は正にコピーアンドペーストと相成れり。

仲　紀久郎